

矢島 洛男 選

緑蔭に見えしヤマネの指細し

高崎市 萩原 啓子

【評】ヤマネは7センチほどで小さく栗鼠に似た尾の長い日本固有種である。夜行性でなかなか見られないから、稀な経験で記録にあたっているだろう。

爽やかや眼のゴミとりし母の舌

川崎市 堅山 道助

【評】昔の母たちはそうしたのか、私にも同じ経験があつて忘れ難い。景色も一層美しく爽やかになろう。

人唄む田んぼアートの案山子かな

湖南市 瀧井 正之

【評】案山子は今や実用的でなくなり、観光として生きている。発明者は玄寶という奈良末から平安初期の僧で民衆のために尽くし大層人氣のあった人物。

娘の墓も野菊も同じ光浴び

いすみ市 今西 節子

胡弓の音夜をせつせつと風の盆

泉佐野市 布野 寿

おおよそで生きる余生や秋うらら

川口市 渡辺しゅういち

つなぐ手を大きく振つて天高し

大阪市 今井 文雄

秋夕焼け今日あるだけの雲集め

西宮市 平田 あい

落ちかかる露こらへつつ笹のさき

西東京市 永井 康信

四十の玉鷲元氣九月場所

越谷市 安居院半樹

高野ムツ才 選

青空は青を重ねて秋たしか

丸亀市 服部 芳郎

【評】炎熱続きの今夏だったが、そんな日々でも空は色を深めて秋に近づいていた。季節を司る神が絵筆をふるっていたかようだ。

赤子てふ声のかたまり天高し

北本市 萩原 行博

【評】全身の力を込めて泣く赤子を声それ自身が全存在と言いつつ。実に心地よい。澄んだ秋天も赤子の成長にエールを送っている。

Tシャツに「I LOVE YOU」と秋麗ら

河内長野市 平野 彰一

【評】酷暑の夏が去り秋日和が続くが、まだTシャツ姿の若者が多い。胸の「I LOVE YOU」の文字が恋の季節を惜しんでいるかのようだ。同名の尾崎豊の歌も連想される。

踊れるよ東京音頭なら少し

武蔵野市 相坂 康

蚯蚓鳴きむずがゆるなる足の裏

宮崎市 長友 聖次

涼新た俳句は老いの宝物

下妻市 神部 貢

大根ぐらい時かねばならぬと大根時く

白河市 円谷 淑子

露の玉吹かれてゐしがとどまり

久喜市 深沢ふさ江

新米といふ殊更によき響き

新座市 田中 美登

おさな子のこぶしのやうに新生姜

日立市 菊池 三夫

正木ゆう子 選

枝豆や逢へば部活の頃語る

川越市 大野有之介

【評】同窓会で、野球部OBが、何十年も前の「あの時の一球」で盛り上がるのに驚いたことがある。まるで昨日のことのよう。「枝豆」がいい。みんなおじさんになっている。介護園大瓢箪の十個来る

松戸市 稲葉 豊美

【評】何に使うのか、想像するだけでも楽しい瓢箪。あの曲線が、しかも大きいのが、十個も。みんなで撫で回すだけでも、癒やされそう。

月を待つ出窓天窓殺し窓

宇陀市 泉尾 武則

【評】同類の名詞を羅列するのも俳句の一手法だが、すらすらと終わらせるのではなく、「殺し窓」でドキリとさせて、立ち止まらせる句に。赤銅の月夜の晩を見ず眠る

相模原市 姫本 陽子

万博のペンチも秋になりにけり

高槻市 黒田 豊子

直線の鷹曲線の帰燕かな

津市 中山 道春

干草に身を埋めるや夏休み

横濱市 栃木 安穂

観月や子らは欄干奏でたり

生駒市 高橋 裕樹

ギザギザに縁ぐる夕焼妙義山

行田市 小河原 一路

水の秋ころは水に添いやすく

芦屋市 田中 俊

小澤 實 選

秋暑し猿の越えゆく電気柵

村上市 鈴木 正芳

【評】電気柵は動物から農作物を守るためのものであるが、猿には役に立たないようだ。秋暑いなか、猿は乗り越え柵に入ってしまったというのだ。新たな対策を考えねば。

猪垣に薬草干すや杖の婆

高知市 加田 紗智

【評】猪垣は、田畑の回りに猪の侵入を防ぐために巡らせたもの。そこに杖をついた婆が、薬草を干す。猪垣との長い付き合いを思う。

くらねこのまなこ濡れるる良夜かな

川崎市 折戸 洋

【評】良夜は中秋の名月の夜。月がきれいな夜、月を見上げていると、近所の黒猫が訪ねてくる。眼がよく濡れていて、名月も映りそう。田の神にどこか供へし冬瓜かな

つくば市 浅田 三秋

ゆく夏や介護ベッドのシーツ替え

東大和市 井上 鈴野

ぐいと胸出してボールや天高し

東京都 天地わたる

烏瓜引けば飛び散る葉のかけら

富士宮市 渡辺 春生

はればれと顔塗り立てて在祭

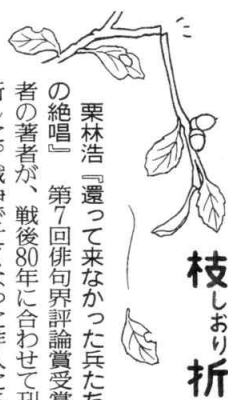
津市 渡辺 健治

秋雲やばふんと尽きてマヨネーズ

伊勢市 藤田ゆきまち

秋風や鉛筆しはし紙の上

越谷市 新井高四郎



栗林浩『還つて来なかつた兵たちの絶唱』 第7回俳句界評論賞受賞者の著者が、戦後80年に合わせて刊行した。戦争で亡くなった俳人たちの半生や最期、時代背景に迫りながら、残された句を紹介する。八散る花の心を問う春の風(千葉三郎)(KADOKAWA、3520円)
池田瑠那句集『心柱』 凝り固まった現代人の意識が自然を前にほどけてゆく様子が伝わってくる。ひんやりした悲しみが底流する著者の第2句集。八仰臥して敷布つめたし夕ざくら(文学の森、2640円)
夏目たか歌集『今日の回診』 日常の中でふと心が動いた瞬間、平凡な光景が鮮明に浮き上がる。ユーモラスな歌が並ぶ。著者の第1歌集。くまモンのマスクをつけてくしやみする女性の座る春の地下鉄(KADOKAWA、2970円)
◆第12回佐藤太郎短歌賞(山中律雄「光園」(現代短歌社))



題字デザイン・イラスト 福田美蘭